

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十八章

Dear my friend-2

— 親愛なる友よ —2—



峯村 明

目次

Dear my friend-2	
お願い	2
登場人物	3
Dear my friend-2	5
あとがき	16
奥付	18

Dear my friend-2

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年10月31日 記

登場人物

リ・コンストラクション38

エドミール	黄金門のバイスロイ
レガリオ	アンベレオ王国の国王
竜門渚ユミコ	ミツハとメルノ両方の記憶を持つ

cast38.JPG

Dear my friend-2

355.

健とレル・ヴァリスがマックス・ペイリーとの別れを惜しんでいた、同じ夜。同じ財団本部の屋根の下で、もう一組が、巡りあっていた。

「陛下——？」

「——バイスロイか！」

陛下と呼ばれた男はエドミールを懐かしそうに見た。

「本当に、そなただったのか！　まるで夢のようだ——」

「陛下には……お変わりなく……」

「ははは……いや、陛下はやめてくれないか。私の名は知っているだろう？　あの頃のように、名前と呼んでくれないかな」

「……レガリオ」

彼、レガリオ七世はかつて、アンベレオ王国の国王だった男だ。表舞台を引退した年寄りたちが裏で優雅に第二、第三の人生を送り、王国の実質を牛耳る。レガリオら若手の役目は華やかな表舞台に立つことであり、裏の重鎮たちの思惑を実行に移すことだった。若手に政策の決定権はない。はっきり言って、お飾りだった。そんな体制が何百年と続いた国の王位にレガリオがついた年、彼の前に『神の代理人』が現れた。

表向きは金星神を、実態は冥界王を祀るアンベレオ王国の神の代理として遣わされたのはイリチャだった。イリチャ本人の意志に関係なく、彼を息子と認めた冥界王が己の代理人としたのだった。

そして、メッサナ市を『奪還』した記念として、メダルが造られた。そこに刻まれる人物は、当初のレガリオ国王から『神の代理人』に変更になり、その製作を任されたのがバイスロイだった。もっともバイスロイは好き好んでそんな役目を引き受けたのではない。彼が芸術家と名乗ったのが運の尽き、新総督シパド直々の命とあってはいやも応もなかった。

実権を握る老人たちにとって、人に非ざる^{あら}冥界王は繁栄と恐怖の象徴だった。送り込まれてきた代理人もまた、人に非ざる繁栄と恐怖、そういう厄介なものの取り扱いは、反論してこず、言いなりになる若い操り人形、すなわちレガリオ国王に丸投げされたのだった。

レガリオ七世は若く、生まれも育ちも人柄も良いという人物で、影の老人たちのすることに疑問を抱くこともなかったが、イリチャには興味を覚えた。『神の代理人』なる枕ことばを脇にどける気になった。その時交わした言葉はわずかなものだったが、この人は信用できる、そう感じたのである。

356.

「まさか、同じ“病院”に入院していたとはね」そう言って彼は笑った。

「驚いたよ。近くに黄金門の血を持つ者がいて、それを必要としているのがイリチャさまだったとは！」

「彼に、お会いになった、とか」

「うん。医師団の中にエウメロス王家ゆかりの人がいて……かつて、一度だけ会ったことがあるのだ。年齢的に近かったもんだから、まあ、縁談があったんだな。成立していたら、アンベレオーエウメロス連合王国ができていたわけだけどね、残念ながら至らなかった。

それはともかく、彼女が私とイリチャさまを引き合わせてくれたのだ。ケガで目が見え

ないイリチャさまは、私がベッドに近づくと顔を私に向け、呟いた。『レガリオ陛下？』

『ええ、レガリオです。“陛下”は要りません。ただのレガリオです』

『ぼくもただのイリチャだよ』

ふたりとも声を立てて笑った。時は流れ、私たちはただのケガ人同士だった。まったく……夢を見ているみたいだ……深夜に隠れ家を襲われ、命からがら逃げだし、気がついたら大やけどを……」

「レガリオ、聞いていいかい？ どうしてそんなことになったのか」

ああ——と、レガリオは夢からさめたような顔で、私はアルチニアと行動していたのだ、といった。

「きみも知っているかもしれないが、アルチニアは、高名な『化学者の館』のメンドルプ博士と肩を並べる実力と才能を持っていた人だ。

ベレオーサ総督府最後の日に、市民のほとんどは炎に巻き込まれ、アンベレオ本国は海中に引きずり込まれ……

なのに、私は化学者たちに拾われたのだよ。

世界になにが起きたのか、自分自身になにが起きたのか、さっぱりわからなかった。けれども私は生きていた。己の国も国民も、なにもかも失ったというのに、私は……凍てついた氷の世界の中に残されていた。

357.

化学者たちには協力者がいて、船を持っていた。空中浮遊船だ。ずっと西方の海の彼方の島国からやって来たのだと言った。リーダーは……なんといったかな……そうだ、ホシナという名の男だった。

ホシナが指図すると、配下の者たちはじつによく働いた。果敢に冷たい炎の中に降りていき、生きている者を拾い上げた。

なんでも、ホシナの娘がそこにいるかもしれないというので、自らの身の危険を押して探索を繰り返していた。

娘は総督府のテラスに放置されていた。胸に黒曜石の刀子を、まるで見せしめのよう

に突き刺したまま。三人の男といっしょに横たえられ——男たちはみな、心臓をえぐり取られていた。

ホシナ族の者たちは、族長の娘ごと男たちの遺体を、黙々と船に運びあげた。三人の男たちは三人ともホシナの知り合いだったらしい。あれほど悲しみに沈んだ人間の姿というものを、私は生まれて初めてみた。自分の体が千々に引き裂かれるようだった。

遺体の回収を終えると、ホシナの船は、故郷の島国へ舳先をむけようとした。メッサナの悲惨な地は凍てついて埋葬もできないから、故郷へ、ということになったのだ。

この時に、生きて拾い上げられた者たちの行く先が問われた。

アトランティス大陸の南方の、暖かい地を望む者が多くいたのだ。そこが無事かどうかはわからなかったがね。比較的近距离の南方へ向けての航海用に、避難用の救命ボートがいくつか母船から降ろされ、それぞれホシナ族の男が船長としてついた。ホシナ族にはただでさえ未知の航海、今生のわかれにも等しかったにちがいないのだが、彼らは黙々と己の運命を受け入れていた。

私は母船が向かう、海の彼方の島国への同行を選んだ。なにもかも失った人間には、未知の世界への旅が似つかわしいと思ったのだ。また、化学者たちの主だったメンバーがいっしょだったのだが.....彼らの選択には理由があったとわかったのは、かなりあとになってからだった。

バイスロイ、錬金術師というのを知っているかい？ この世のあらゆる^{ことわり}理に通じ、あらゆる^{ことわり}理に介入できる者。化学者たちは元素の次元で^{ことわり}理に介入する。だから卑金属を貴金属に変えることができる。

化学者たちには協力者がいた、と言っただろ。協力者とは何者か。それは——元素霊だ。

化学者たちが世界の果ての島へと向かう時、四大元素霊のうちの二つが化学者たちと深い絆を結んでいた。

ホシナ族と、アマセオ。

どちらも世界の果ての島から来た。土の精霊と風の精霊だ。

358.

" tenhaku omae no asobi wo ha
 kumo wo wakete asobu nari
 hoshi no shidai no kami nareba
 tsuki no wa ni koso mahi tamae "

レガリオが唱えたそれは、エドミールには呪文のように聞こえた。言葉はエキゾチックな響きで、メロディは単調で、しかしリズムカルだった。

「異国の、古い言葉のようですが.....」

「うん.....mikagura っていうのだそうだ。とても美しくて印象的だったので、幾度か聴くうちに覚えてしまった。今でもこうして思い出せるくらいに。意味はなんだったかな.....いや、意味はともかく、夜空に浮かぶ大きな満月.....そんなイメージが浮かんでくるんだよ。実際にみたのかもしれない」

「.....もしや」エドミールは、はた、とソファの上に上体を起こした。「もしや.....これは日本語では.....」

「おお、『世界の果ての島』は、今は日本と呼ばれている。この詩は当時の島の王がアマセオに授けたもの」

「ちょっと待って！ ちょっとお待ちを！」

ここ数日で幾度もこの言葉を口にした気がする。

「知り合いに日本人がいるのです、ひじょうに古い家柄のひとで、彼女になら.....！」

彼女とはもちろん、彼女である。

「こんな時間に申し訳ない！」

「気になさらないで。目が冁えてしまって、とても眠れそうになかったんですよ」

自室のドレッサーの前で呆然としている時にお呼びがかかったのだった。化粧を落とす前でよかったわと、ユミコはこっそり思った。スーツの上着は脱いでしまっていたので代わりに薄手のニットを羽織って来た。で、何の用かしら。

「レガリオ、すまないが、さっきのをもう一度」と、エドミールは室内にいたもうひとりの男に促した。

「これは——天白の^{みかぐら}御神樂——」

「意味が、おわかりですか」

エドミールの問いに、ユミコは頭を振った。にわかに信じがたい、という意味で。

「ミツハの記憶を、断片的にはありますが、甦えらせることができます。『世界の果ての島』で、ミツハは王の船の帰還を出迎えました。島を出ていったホシナ族の人たち、同行したアマセオさまはメッサナの化学者たちを連れていました。

極めて……異常な事態が起こったのだとミツハは直観しました。ホシナ族とアマセオさまの出立もさることながら、化学者たちが彼らの館を離れるなど、前代未聞のことだったからです。ただ、化学者たちがやってくるだろうことは、前もってわかっていました。化学者たちの長、メンドルプ博士がすでに到着していたからです」

「メンドルプ博士が世界の果ての島へ？ 先行して？」

「はい。オリカルクムの円盤を追って。ヤスウさまがお連れしたんです」

ミツハの記憶を辿って、ユミコは語った。オリカルクムの円盤はイリチャを閉じこめたものであったこと。特殊な金属オリカルクムに魅せられたメンドルプ博士は、飛び去るその円盤を追って世界の果ての島までやって来たこと。博士を連れてきたのは評議会のヤスウという男だったこと。

「イリチャを閉じこめた円盤が——世界の果ての島に——」

「イリチャが放った負の方向の熱は世界を丸ごと凍らせるほどのものでした。その力をおそれた神々がオリカルクムの中に封じ込めたのです」

「ふむう……そんなことがあったのか……そうだ、私は評議会のヤスウを知っているぞ、彼は無事だったわけだ」

「ええ。ミツハはヤスウさまには言い尽くせないほどの恩がございます……」

359.

^{みかぐら}御神楽のお話を先にいたしましょうとユミコは言った。

「ミツハはホシナ族に身を寄せていた時期があり、まさにそのころ、アマセオさまがホシナ族を訪れました。ですからミツハはホシナ族ともアマセオさまとも親しかったのです」

最前から出てくるアマセオという名には聞き覚えがあるとエドミールは思った。たしか、レガリオ王のベレオーサ行幸団にまぎれてアンベレオの首都から封鎖中のベレオーサへ侵入するという、エウメロスのレルの無謀な作戦に同行した男だ。

「ホシナ族はくにの食糧事情を根底から支えていました。というのに、知らぬうちに、王の後継者争いという、まったく身に覚えのない事件に巻き込まれてしまい、くにから排除される寸前でした。

一方のアマセオさまはその星の巡りが王を脅かすとされ、^{オモイカネ}日読みの者から危険視されていました。王の左大臣という地位にあった^{オモイカネ}日読みは政府の正規軍を動かしホシナ族ごとアマセオさまを討とうとしましたが失敗に終わりました。正規軍は敗北したのです。いくさに勝ったとはいえ、ホシナ族もアマセオさまも島にいられなくなり、彼らは出奔しました。手を貸したのは、王ご自身。ホシナ族の船、空中浮遊船は王所有のものだったのです——」

ありがとうございます、とユミコはテーブルに置かれた紅茶を手に取り、喉を潤す。それから改めて目をあげ、お茶を運んできた男を見つめ、「レガリオさま？」とつぶやく。相手は控えめに微笑しうなずいた。

ユミコは目礼を返し、話を続ける。明朝、エドミールは帰国の途につかなければならない。ユミコ自身も。時間は限られ、レガリオとの対話の機会が再び得られる保証はなかった。

「ホシナ族もアマセオもやむにやまれぬ出奔でした。が、事情が変わりました。
アトランティス大陸で起こった異変は全世界に広まっていき、世界の果ての島も例外では
ありませんでした。世界の生き物は絶滅するのではないかと危惧する者さえおりました。
急激な気温低下に襲われたために、動物にしろ植物にしろ、食べる物が無いのです
から。
そこへ、化学者の集団がやってきた。彼らのメンタリティは食糧に困窮している人々を
無視することなどできませんでした。わずかな植物の根や果実から食べられるものを作
り出し、そこからさらに作り出す、といったやり方で、食糧を増やし分配したのです。

王は彼らの行為に感謝し、なによりホシナ族とアマセオの処遇を改めようと……」

「そうだった。思い出しました。あのミカグラはその時に賜ったのでしたね」と、レガリ
オは膝をうつ。

「アマセオさまは、軍を仕切る右大臣フツヌシさまからは『まつろわぬ星神』として認識
されていたのです。
でも、聞くところによりますと、アマセオさまのお子さまの名付け親は、オモイカネさ
ま。アマセオさまの子孫はその後、オモイカネさまの陰からの支援を受けて栄え、後世、
日読みの職を継ぐまでになるのです。
オモイカネさまとアマセオさまのかつての確執の記憶を後世に残さず、和らげようと、
王が授けられたのが、あの詩なのです……

天白御前の遊びをは
雲を分けて遊ぶなり
星の次第の神なれば
月の輪にこそ舞いたまえ

アマセオさまが謀反の罪を着せられたことでご実家シトリ家は一度は没落。天白とは、
オモイカネさまが名付け親となったアマセオさまのお子ヒワシさまの子孫で、シトリ家
を再興させたアメシラハさまのこと。

星神を祖にもつそなたは天空を駆け、月に舞うのだ。以降、風神となられよ。風神であっ
ても星神の裔である、と。

以上が、アマセオさまが星神であると同時に風神となられたいきさつ。
天白の御神楽は、当時の島の王ご自身が即興で謡われたものなのです。

360.

「凍てついた世界を蘇らせるために、すべての元素霊に召集がかかり、ホシナ族も、アマセオさまも、ミツハも、行かなければなりませんでした。ですから、ここからはミツハではなくメルノの記憶になります。

化学者たちの多くはメンドルプ博士とともに島に残り、オリカルクムを研究しつつ、島の復興に尽力されました。『世界の果ての島』の国土が立ち直ったのは、メッサナの化学者たちがただでさえ冷涼な、慣れない気候の北の土地で、来る日も来る日も働いた、そのおかげなのです」

「貴女はメルノさまだ！」レガリオは唐突に言った。

「原住民の人々と私らとでは言葉も通じなかったのに、間を取り持ってくれたでしょう？
どうして私らの言葉をご存知なのか不思議に思っていたのですが.....」

「メルノは.....メッサナ出身なのです。黒髪黒い目の、世界の果ての島の人々と似た容姿は、よんどころない事情があつてのこと.....」

「なるほど.....深くは聞きますまい.....メッサナの歌をご存知なのもそのため.....まさか、原語の『Auld Lang Syne』を聴くことができるとは.....！」

「あ——今宵のコンサートをお聴きに？ え？ 私、原語で歌ってたんですか？」
ユミコは目を泳がせてエドミールを見ると、エドミールは、そうです、とうなずいた。

「ええ！ 私もアルチニアも、最初から最後まで聴かせていただきました！ 夢のようでした！ 化学者たちは身を寄せ合ってあの歌を口ずさみ、メッサナを偲んでいたのですよ」

レガリオは両手で胸を押さえ、昂る気持ちを鎮めようとした。

「バイスロイ、私が今どんな気持ちでいるか、わかるかい？ 今宵のコンサートでわかった。そなたが私に言ったことはすべて本当だった。そなたは本当に芸術家だった。バイスロイは偽名ではなかった。黄金門の血を持つ者だった。そして私らに原語の『Auld Lang Syne』を贈ってくれた。すべて本当だった。ありがとう。親愛なる友よ。それを伝えたかったのだ。親愛なる友よ」

361.

「レガリオ——」

エドミールは上着の内ポケットを探った。そして取り出したものをテーブルの中央に置いた。室内の照明にきらりと輝くそれは——

「バイスロイ、これは——」

「アンベレオ国王の命により、私が造ったのです」

「——これが！ 情けない話だが、初めて見る。ああ、イリチャさまのプロフィール——」

触ってかまわないかと尋ねた上で、レガリオはそろそろとメダルを取り上げ、つくづくと眺め、ふと、表情が固まった。目をあげてエドミールを見たが、その視界にはユミコが映っている。

「レガリオ、ミツハという女性は、イリチャの本当の母親なんだよ」

ああ、とレガリオはうめいた。そして無意識にメダルをひっくり返し、また表情が固まった。「片面は金、片面は鉛——」

「最終的な鑄造は化学者の館で行われました。つまり、化学者の手によるもの。これは私の国の地下から掘り出されたのです」

エドミールとユミコが部屋を退出し、レガリオは最前の対話を悶々と振り返って眠れぬ夜を過ごしていた。

かつてのアンベレオ王国の国として歪んだ構造に、レガリオ本人も、周囲の若者も皆気づいていた。しかし積み重ねてきた歪みはあまりに強固で、正す、という力は生まれなかった。いや、そういった力は、芽生えた瞬間から摘み取られた。裏側の権力の意向以外のことは、国民にはなにもさせないのだ。

そうはいっても——とレガリオは堂々巡りを繰り返す。なにかできたのではないか。たとえば、権力によって……あのときのバイスロイのように……葬られても。

アルチニアや化学者たちとの出会いはその回答なのかもしれない。

彼らの考えはいたってシンプルだった。重要なのは、自然と共に、すなわち、元素霊と共に生きることなのだ、ただそれだけだというのだ。

化学者たちはかつても現在も、皆、気持ちのいい人たちばかりで、レガリオは不快な目にあったことがなかった。レガリオが『化学者の館』をそっくり支配下に置いていたアンベレオの国王だと承知のうえで。もちろん、レガリオの性格からして身も潰れんばかりの責任と罪悪感をおぼえていたし、望外の扱いを受けていると思ったし、たいへんな気まずさを抱いた。

時間が経っても、化学者たちの態度は変わることはなく、しだいに、彼らと暮らすことに心地よさを感じ始めたレガリオである。化学者のひとりがレガリオに言った。「どここの誰かは関係ない。ただ、貴方は我々と同じ種類の人間なのだよ」、と。

その言葉に、こんなに幸せでいいものかとさえ、思った。

それはレガリオだけでなく、かつて『化学者の館』を訪れたマミヤが感じていたことと、まったくいっしょだった。

だから何故、人目を忍んで隠れ家にひそみ、警察に目の仇にされ、放火されねばならないのか.....

と、スマホが震えた。アルチニアだった。

《急だけど、明日、出立することになったわ。飛行機は財団のプライベートジェット。行先はポルタアウレア公国。私たちは医療チームに増員されました》

あとがき

冒頭にその都度掲載しておりますが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、それ、無視してください！

お願いします！

さて、バイスロイとレガリオ王の再会でアマセオを描くとゆー予想外の展開。

天白御前の遊びをは～ は伊勢神宮・神宮神楽歌のなかの「てんはくのうた」(神宮文庫架蔵本 一門一一四一号。天文十一年(1541) 出典は『天白紀行』山田宗睦 著

伊勢神宮所蔵ということは御神楽(宮中で行われる神楽)でよいと思われ。

天白こと天^{アメシラハ}白羽はアマセオの家系だとはっきりしてるし(miemuraとしては)、風の神だという古い伝承がいくつかある。ただし根拠は不明。またこの家系はのちの陰陽師(天文方)に繋がってる。また、『お酉さま』として人々に親しまれた存在でもある。

などなどから作り上げました。

ところで、世界の果ての島の、『王』と呼んできました。ほかでもない、あのお方のこと。いろいろ迷った結果です。

ちなみにホツマツタエではかのお方をなんと呼んでいたかというと、『アマツヒツキ』とか『スベラギ』などで...『天皇』という言葉は中国由来ではないかと思われます。漢字ですし...一般人の呼び方はわからない。

それでも、アマテルキミがトヨケ重篤の知らせにミヤヅに駆けつけたとき、人々が不安がって、帰らないでくれと取りすがって泣いたとか、オシホミミの即位には人々が集まってきたり身動きがとれなくなった、という記述があり、とんでもない雲上人じゃあなかったようです。特殊な存在だという認識はあったものの、いつもそこにいる、ありがたなおひと、みたいな感じ。立派な建物を造って祀り、拝むようになったのはずーと後世の、崇神天皇あたりからです。

なお、本文中のホシナ族、アマセオの話は、
Salamander in the circle 第十一章『天津甕星』から第十五章『ふたつの北極星』まで

2026 年 10 月 31 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十八章 Dear my friend-2

2026 年 11 月 1 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラスト AC」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

リ・コンストラクション-38

著 者 峯村 明
イラスト イラストAC

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
